



1994年5月1日生 牡 栗毛
 父サンデーサイレンス
 母ワキア(父Miswaki)
 馬主/永井啓武氏
 調教師/橋田満(栗東)
 生産牧場/稲原牧場
 通算成績/16戦9勝(うち海外1戦0勝)
 総取得賞金/4億5906万7000円
 主な勝ち鞍/98宝塚記念(G I)
 98毎日王冠(G II)
 98金鯱賞(G II)
 98中山記念(G II)
 98小倉大賞典(G III)
 馬名の由来/父名の一部+冠名

SILENCE SUZUKA's
Impressive Scenes



「逃げて差す」大逃走劇
 1998年 金鯱賞(G II)

1000m通過58秒1というハイペースで大逃げ。直線に入っても後続をさらに突き放し大差でのレコード勝ち。底知れぬポテンシャルを見せた



待ち望んだ初GIタイトル
 1998年 宝塚記念(G I)

金鯱賞同様、一人旅で直線へ。最後はステイゴールド、エアグルーヴの追撃を凌ぎ、5連勝で初のGIタイトルを手にした



無敗のGIホース2頭を圧倒
 1998年 毎日王冠(G II)

エルコンドルパサー、グラスワンダーらを相手に、59°を背負いながら完勝。G IIながら披露したウイニングランに13万人の観衆が沸いた

第 6 位

24683 P

前回5位

1位DOWN

サイレンススズカ

疾風の如き逃亡者

All Time THE BEST 100 HORSES

切り、破竹の6連勝を遂げた。2着に1秒8もの大差をつけてレコード勝ちした金鯱賞では、4コーナーで早くもスタンドから拍手が湧き起こった。橋田調教師の長い競馬人生でも初めてのことで、感動したという。

「あの馬には、普通では考えられない結果を出す力があつた。例えば、GIで2着を3秒離して勝つこともあり得る馬だった」と武騎手。

競馬は、他馬という「障害物」に進路を塞がれないようにしなければならぬ。「障害物競走」と言える。が、先頭を走っている限り、不利を受けることはない。また、競馬では、絶対的な走破タイムも武器になる、と武騎手は言う。「駆け引きなど関係なしに、何メートルを何秒で走れば勝つてしまうというのがありますから。相手関係などを考えず、折り合いと、今何秒で行っているか。それだけでいいんです」

他馬がついてこれないハイペースで先頭を走り切れば、ゴールしたときには勝っている。自分だけが、文字どおり「別次元」にいればいいのだ。まさに競馬の「絶対」の形である。

——この馬は現時点では世界一だ。武騎手がそう思っていたサイレンススズカはしかし、98年の天皇賞(秋)のレース中に骨折し、世を去った。

唯一無二の夢を見せてくれた、「絶対」の強さを誇る名馬であつた。

何が起るかわからない競馬にも「絶対」はある。そう思わせてくれたのが、サイレンススズカであつた。

転機になったのは、旧4歳だった1997年の香港国際C。5着となったそのレースのあと、テン乗りだった武豊騎手と橋田満調教師(当時、以下同)で話し合い、今後は無理に抑えず、気持ちよく走らせてやることにしたのだ。その方針転換と成長曲線がマッチしたのだから、翌98年、序盤から飛ばす走りですべてのパフォーマンスを披露する。年明け初戦のバレンタインSを逃げ切り、中山記念で重賞初制覇。さらに小倉大賞典、金鯱賞も勝ち、宝塚記念でGI初制覇。毎日王冠も逃げ

考えられない結果を出す
 別次元にいた名馬

年代別・性別ランキング

幅広い世代から支持を得る

●10代……6位	●50代……6位	●男性……5位
●20代……7位	●60代……9位	●女性……9位
●30代……6位	●70代……14位	
●40代……5位		

Voter's Voice

他を寄せ付けない逃げは唯一無二(50代・男性)●弥生賞での超出走遅れから2コーナーで馬群に追いついたスピードが、その後の出世を予感させた。最後はそのスピードがゆえの残念な結果であった(50代・男性)●サイレンススズカが競馬を救ってくれました。類稀なるスピードで見る者を圧倒する競馬の楽しさも、別れの悲しみも(30代・女性)●今でも史上最強馬はサイレンススズカだと思っています(60代・男性)